



上記の図で説明しますと、(1)の満足する場合は、現実の社会の形式と自分の感性の実感が同じ場合です。次に(2)の感動する場合は、自分の感性の実感の方が、現実の社会の形式より遅れており、そのズレが大きいほど感動します。更に、大変重要な、人類を飛躍的に発展させ又は、その人の実現する自己を発見できる解釈が、(3)の異和感を持つ場合なのです。

- ① 現実に深く関わり、真剣な生き方をすると形式と実感の位置が、はっきりと解る
- ② この「ズレ」は、天啓の一瞬であり、自分に与えられた歴史的使命を教えてくれる。
- ③ 納得できる所まで現実を変えていく潜在能力の存在の証明である。

この解釈は、現実の形式と感性の実感の「ズレ」を訂正し、改めていく所に人間の幸福と成長の原理があると考え、この異和感というのは、現実に生きている人間に「お前は何をやるために生まれてきたのか、何をなすべきなのか」という歴史的使命を教えてくれている事になるのです。

(『この哲学から日本の復活がはじまる』上巻・第7章より 共著・鈴木繁伸/芳村思風)

今回から粉飾決算の多い本当の理由をいくつか並べていきます。

企業の目的は、その企業の事業を存続させ発展させ社会に貢献することです。粉飾は、問題を先送りして浪費を助長させ、責任をごまかし、期間計算を狂わせ、経営判断を誤らせ、過大な税金も支払います。例えば架空売上は、その余分な消費税や法人税を支払います。そして最後は、資金繰りを悪化させ、取り返しのつかない結果となり、破綻し、会社は、倒産します。粉飾する経営者は、公認会計士の監査のない会社、監査役が機能していない会社が多いという社会構造から、「売掛金」「売上」「商品」「期末商品」という仕訳を追加し、利益を膨らませます。

しかし、営業CFの小計が赤字ということは、何を意味するのか、原因分析し売上が減少しているという事なら、お客様満足を得ていない、つまり経営努力が足りないという事で経営者の責任です。そのような経営者は、つまり自らの意識体験を自ら観察する内省という心の働きが少なく、意識が常に外に向かっています。「景気が悪いからだ」「いい営業マンがない」「パナソニックでも赤字だ」「メインの得意先が仕事くれないんだ」等々講釈をたれています。それを聞いた社員は、また始まったと思いますが、反論すれば赤字を理由に解雇されるので、反論できません。賞与は減少し、出来る社員から退職していきます。残った社員は指示待ち族ばかりが残ります。経営者に主体性な意思がなく他人に責任転換することから粉飾決算がはじまり泥沼に陥ります。

予測した売上は実現しないことが多いのに、固定経費はいつも決まって出ていきます。支出を抑え収支を合わせ、まず責任転換することはやめましょう。

鈴木繁伸公認会計士・税理士事務所

経営計画策定・監査・会計・税務・労務・証券仲介業・宅建業など

所長/鈴木 繁伸 税理士/中小企業診断士/大輪 智彦 税理士/古河 宙 税理士/竹田 卓史 税理士/大槻 道同 社会保険労務士/井上 宣子

【京都オフィス】京都市下京区仏光寺通柳馬場西入東前町408-1 TEL.075-352-3336 FAX.075-352-3033

【東京オフィス】東京都中央区日本橋堀留町2-5-10 SINCITY日本橋1101 TEL.03-6206-2108 FAX.03-6206-2181

http://www.suzuki-mb.co.jp/ E-mail:suzuki@suzuki-mb.co.jp 何でも気軽にお問合せください。

【お詫びと訂正】平成26年5月号におきまして、弊社の不手際により誤表記がありました。深くお詫び申し上げますとともに、上記の通り訂正・再掲載させていただきます。
 左上図表内 (誤) 現実への違和感(歴史的使命)の構造 → (正) 現実への異和感(歴史的使命)の構造
 会社概要内 大輪智彦氏の肩書 (誤) 税理士 → 税理士・中小企業診断士